

# 偽りの鏡

福田和代

5

「これは、警察に被害を届けるべきですね」

勇山いさみやま記者の紹介で連絡した弁護士よこかわの横河は、話を聞くなり即座にそう言った。

記者会見は無事に終わったものの、守谷もりや穂乃果ほのかの母親から電話が入り、転校先の学校で彼女がひどい状況に置かれていることがわかった。私はすぐ弁護士に連絡を取り、その日のうちにと頼み込んで、立川たちかわのビジネスホテルまで来てもらうことになったのだ。

横河弁護士は、五十歳前後の、ほっそりした理知的な顔立ちの男性だった。黒い縁ふちのメガネをかけ、値が張りそうなシルバークレームのスーツを着ている。手指は爪の先まで清潔に整えられ、手入れのいい肌は血色けっしよくがいい。

「ネットでの誹謗中傷事件は、軽い気持ちでやっているイタズラから、手の込んだ確信的で犯罪的なものまで様々です。湯川さんのケースは、名誉棄損にあたります」

ホテルのロビーに置かれたソファに座り、横河はスパスパと歯切れのいい言葉を並べた。私からの電話を受け、すぐに自分でもネットを検索してくれたそうだ。

「ネットの嫌がらせは、本当に多いんです。警察も、すべてには対応しきれないほどです。ただし、明らかに名誉棄損や威力業務妨害にあたると判断されるケースでは、動いてくれます」

横河の言葉に、安堵のあまり「良かったあ」と声が漏れた。ホテルのフロントに立つ女性が、ちらりとこちらを見た。

「週刊手帖の記事が出てから、いきなりこんな状況に追い込まれまして、情けないですが、頭が真っ白になっていました。もう、どうすればいいかわからなくて」

「当事者ですから、当然ですね。著名人を狙う嫌がらせも多いです。

その中でも、湯川さんのケースは度を超していますね」

「そんなに、ひどいですか」

「私もいろんな相談を受けてきましたが、ここまでひどいケースは珍しいです。たとえばこの合成された動画」

横河が自分のタブレットで開いて見せたのは、私が男子生徒の耳

を掴んで揺さぶっているフェイク動画だった。

「手が混んでいますね。動画、写真、中傷めいた目撃情報と、数や種類も多い。見るのも嫌でしょうけど、ひとつひとつ証拠として残して、警察に相談する時の材料にしましょう」

「わかりました」

横河は、ネットで見つけた中傷について、どんな情報を保存しておけばいいか、説明してくれた。

「先ほどの動画のように、中でも悪質なものをいくつか選んで、発信者情報の開示請求を出してはどうでしょうか」

「開示請求——発信者情報ですか」

「動画サイトやプロバイダに、発信者のIPアドレスや登録された個人情報を開示させるんです。相手の住所や氏名がわかるケースもありますよ」

「そんなことができるんですか」

匿名性とくめいせいの高いネットでは、犯人を見つけるのは無理だろうとあきらめかけていた。

「手続きは私のほうで代行できますが、時間と手間がかかります。ただ、たとえばこの動画なら投稿されたのが三日前ですから、相手を突き止められる可能性がありますね」

「時間が経つと突き止めにくくなりますか」

「ええ。たとえば動画投稿サイトにしても、プロバイダにしても、情報を三か月程度しか保存していないんです。時間が経過するほど、見つけにくくなりますから、早めに着手したほうがいいですね。そうすれば、損害賠償の請求や、誹謗中傷記事の削除を請求することもできますから」

「ぜひ、お願いします」

藁わらにもすがる気分で、私は頼んだ。横河が提示した、それぞれの手続きにかかる費用は、ごく普通の公立中学の教師である私には、払えないほどではないが、正直かなり痛い金額だった。それでも、なんとかして工面くめんするつもりだった。

——私をこんな目に遭わせたやつが何者なのか、どうしても知りたい。

嘘ばかりの記事も、ぜひ削除してもらいたい。元通りの日常を、取り返したいのだ。

横河が帰った後も、私はしばらくロビーで放心していた。守谷の母親から学校に電話があった後、そそくさとホテルに戻ってきた。辻山つじやまに送ってもらおうのを待たず、タクシーを呼んだのだ。

——何か食べに行こうか。

時計を見ると、午後九時になっていた。横河との話に夢中で、食事じも忘れていた。

ホテルを出てすぐ、スマホに電話がかかってきた。教頭のはじ土師からだった。

『湯川先生、なんともありませんか』

消えるようにいなくなったので、心配してくれたのか、教頭が尋ねた。

「大丈夫です。弁護士と会っていました」

『ああ、そうですか』

「発信者情報の開示請求という、手続きなどを教えてもらっていました」

『その弁護士さんにお問い合わせということですね』

「その予定です」

教頭はホッとした様子だった。

『実は、明日からのことで電話したんですが』

「明日からですか」

普通に出勤するつもりだった。

『明日からしばらく学校に出勤せず、自宅かホテルで待機してください』

思いがけない宣告だった。頭を横から殴られたような衝撃を受けた。

「そんな——どうしてですか。今日の記者会見で、私に関する記事

は、デマとご理解いただけたものと思っていました」

『もちろん、私たちは湯川先生を信じていますよ。いくつかのテレビ局が、夕方の番組で湯川先生の記者会見を取り上げていました。そちらも、私たちが確認した限りでは、好意的な報道でした』

「それなら——」

『ですが、しばらく様子を見ましょう。守谷さんの話も聞いただけでしょう。湯川先生の責任ではありませんが、今の状態で先生が教壇に立つと、生徒が落ち着かないですから』

——生徒が落ち着かない。

私は呆然とし、教頭の言葉を噛みしめていた。生徒のためにと言われると、教師は多少のことなら耐え忍ばねばならない気分になる。殺し文句だ。

だが、つい数時間前まで、教頭は正反対のことを言い、私を支持していたはずだ。

「それは、生徒の保護者か誰かが、そんなふうに使っているんじゃないか」

つい、難詰なんきつするような語調になった。私が帰った後で、誰かが「湯川を学校に来させるな」と言いだしたのに決まっている。腹立たしさで悔しさで、眉間みけんに皺しわが寄った。

『——湯川先生、落ち着いてください。最終的に判断したのは、校

長と私ですから』

「でも、誰かがそうすべきだとクレームをつけたんですよね！」

やるせなくて、声がひび割れた。教頭のため息が聞こえ、必要以上に感情的になっていたことに気がついた。週刊手帖の記事を見て以来、自分は落ち着いている、冷静に対応していると考えてきたが、考えている以上に傷ついていたのかもしれない。

『私に、湯川先生の気持ちがわかるとは言いません。週刊誌に載ること自体、想像もつかない事態ですから』

「——すみません」

『湯川先生が謝るようなことではありませんよ。私も、なんとか早くおさまるようにと考えてはいるのですが、こういうことは一度始まると、なかなか沈静化が難しいですから』

「教頭が尽力してくださっているのは、わかっています。無理を言っつてすみません。この数日、自分がどうなるのかわからない不安にかられていました」

『——そうでしょうね。たいへんだとは思いますが、しばらくは辛抱が必要です。人生って、うまくいかないものですよね。どんなに頑張っているでも、どんなに真面目にやっても、突然、思いがけないことが起きて、足をすくわれることがありますよ。ですが、そういう不幸に見舞われた時に、人間の真価が試されるんだと思

ます』

私はただ、黙っていた。今こんな場面で、自分の真価なんか試されてもなという心の声が、無言のうちに滲み出たのか、教頭が小さく笑った。

『今こんなことを聞かされても、ただ腹立たしいだけだとは思いますが――。しばらくは修行だと思って、待機してください』

「修行、ですか」

教頭にそこまで言われては、呑むしかない。

「私が休む間、授業とクラスはどうします」

『神崎先生に、クラスのホームルームを担当してもらいます』

教頭は、あっさり副担任の名前を挙げた。

『授業は、他の数学の先生方に協力していただいて、手分けします』

「もう、そこまで決まっているんですね」

外堀を完璧に埋めてから、私に電話をかけてきたのだとわかった。

今さらじたばたしても、逃げようがない。

『先ほど、誰かがクレームをつけてきたのかと言われましたが』

教頭は、私に少し譲歩して、現状を知らせようと考えたようだった。

『先生の想像以上に、たくさんの保護者が電話をかけてきたんです。メディアの取材や記者会見などがあって、うちの子が怖がっている



と言つてね。非日常の世界が、突然始まったわけですから』

「——そんな」

担任しているクラスの子どもたちの顔が思い浮かび、唇を噛んだ。今日、学校で会った時には、みんな元気そうだったし、笑顔で挨拶あいさつしてくれた。怖がつているというのは、思い過ごしではないのか。

とはいえ、保護者にそこまで言われては、学校側が私を教壇に立たせるのが難しいこともわかる。

「わかりました。しばらくはホテルか、自宅でおとなしくしていただきます。ですが、いつまでそうしていればいいんでしょう？」

『大丈夫、状況が落ち着けば、すぐ戻ってこられますよ。毎日、連絡を取りましょう。様子を知らせますから』

教頭は誠実な人だった。おそらく、言葉の通りに毎日連絡をくれるのだろう。これ以上、なにか言えば、教頭を追い詰めるだけだと悟り、自重じちょうした。

「——わかりました。待ちます」

『聞き入れてくれてありがとうございます。湯川先生、力を落としてはいけませんよ。人生は長いんです。いろんなことが起きます。人間誰でも、一度や二度は大きくつまづくものですから』

どう答えればいいのかわからなかった。口のなかで、もごもごと呟いた。教頭は優しい声で私をなだめ、明日も必ず電話するともう

いちど約束して、通話を終えた。

——教頭は、私が挫折を知らないと思っているのだろうか。

気づくとホテルを出て、隣の古いオフィスビルとの境にある暗がり  
に隠れ、スマホを耳に当てていた。我に返るまで、ほかの何も目  
に入っていなかったようだ。通りすぎていく年配の女性が、じろじ  
ろと私を見ていた。

そもそも、周囲から見れば、今の私は自分に満足しているように  
見えるのか。

テレビに出ているから？

本を書いているから？

著名人扱いされて、マスコミにちやほやされているから？

だが、その実情はと言えば、仕事に夢中で家族を顧みないと妻  
に叱られ、実家に戻られてしまうような家庭を抱えている。家族を  
顧みないわけじゃなかった。この国の公立中学の教師が、人並み以  
上に忙しいからだ。真面目に仕事をするなら、自宅にも仕事を持ち  
帰らないとやっていけない。

今はそうでもないが、常在じょうざい中学の一部の生徒が荒れた時期もあ  
った。ちょうど、私が「鉄腕先生」などと呼ばれたころだ。繁華街  
の見回りを始めたのも、子どもたちだけで夜の街をうろつくのを止  
めるためだった。

それがきっかけで、脚光を浴びただけだ。

近くにあるコンビニに向かった。どこかで夕食をとるつもりだったが、すっかり食欲も失せていた。コンビニで親子丼の弁当と缶ビール、コーヒーなどを選び、レジに並んだ。順番が来ると、レジの若い女性が、まじまじと私の顔を見つめた気がした。POS端末でレジを打つ間も、こちらの存在が気になってしかたがない雰囲気だ。隣のレジに並ぶ列から、「鉄腕先生だ」という若いささやき声も聞こえてきた。

「こんなところにもいいのかな」

押し殺した声だが、私の耳に届くかもしれないとは思わなかったのだろうか。顔が熱くなり、こちらが何か悪いことをしたわけでもないのに、いたたまれない気分になる。

金額を聞いて、QRコード決済で支払った。釣りを受け取らなくていいし、早い。

「あの——」

レジの女性が何か言いかけたが、私は袋をひつつかんで逃げるように飛び出した。

「あ——」

という、ため息にも似た声が、後ろから追いかけてきた。私は小走りになり、コンビニからホテルまでの道のりを急いだ。

べつに有名になりたかったわけじゃない。顔を知られると、ただ道を歩いていても、何をしていても指を差される。鉄腕先生だときさやきかわされ、勝手に写真を撮られ、視線がどこまでも追いかけてくる。

ふだんはいい。私はテレビのバラエティに出ても、子どもの教育に熱心な教師と見られてきたから、声をかけてくれた人たちも、みんな喜んで握手やサインを求めてきた。「子どもの見守り、頑張つてね！」と声をかけてくれる中年の女性もいた。家に帰れば、きつと中学生や高校生くらいの子どもがいるのだろう。その子どもたちの、健全かつ安全な成長を心から願っているのだろう。そう感じるような、温かい声援ばかりを受けてきた。

それがどうだろう。ちよつとフェイクニュースが流れただけで、みんな私を遠巻きにする。まるで監視するみたいにじろじろ見つめて、ひそひそと話をするくせに、声をかけてはこない。

これまで自分がやってきたことは、何だったのだろうか？ あの笑顔や励ましの言葉は、上っ<sup>うわ</sup>面<sup>つら</sup>だけのものだったのだろうか。私がテレビの人気者だったから？ みんな、私の何を見ていたのだろうか。

ホテルに戻る前に、誰かがこちらを見ていないか、振り返って確認してしまった。顔を伏せ、急ぎ足にエレベーターホールに向かう。フロントの女性が、「お帰りなさいませ」とよく通る声で言った。ふ

だんなら私も愛想よく挨拶するところだが、今日は小さく頷いただけで、そのままエレベーターに乗り込んだ。

——マスクとサングラスがいるな。

顔を見られるのが怖い。そんな気分になったのは、生まれて初めてだ。

誰かが乗り込んでくるのを避けるため、エレベーターの「閉」ボタンを連打し、ドアが閉まるとホッとした。誰にも会わないよう祈りながら、部屋に戻る。

一昨日は、自宅に戻って中間テストの設問を考えていた。あまり日数もないし、良い問題を作るのに頭を悩ませていたのが懐かしい。今となってはあれが、とてつもなく平和な時間だったのだと思える。

ホテルの部屋で食事をした。缶ビールを半分飲んだころ、スマホに着信があった。

妻の茜あかねからだとわかり、私は電話に出るのをためらった。結衣ゆいは今日、学校に行ったのだろうか。それとも、行きたくないと言っていたとおり、休んでしまったのだろうか。

——私のせいで。

『どうだった。何か変わったことは？』

茜の性急な問いかけに、ため息をつきそうになる。

「明日からしばらく学校を休めと言われた」

『ふうしてっ。』

「そんなこと、僕にもわかるわけじゃないか！」

茜に非難された気がして、つい強い口調で応じてしまった。彼女はしばらく黙っていた。

『——あのね、鉄ちゃん。今回のことは、鉄ちゃんが悪いわけじゃない。それは私たちもわかってる』

「——ごめん。生徒の親たちから何件も電話があつて、湯川を教壇に立たせるなど言われたと聞いて、いらいらしちゃって。もう、何が本当なんだかわからないよ」

『世間が、ちょっとナーバスになっているんだと思う。鉄ちゃんは見てないかもしれないけど、お昼のバラエティ番組とか、けっこう内容がひどかったから』

「今日の昼には記者会見を開いて説明したんだ。記者の様子を見ていたら、わかってもらえたと思っただけど」

『夕方の番組では、たしかに記者会見の内容が好意的に報道されていたと思うよ。鉄ちゃんの答え方も落ち着いていて良かったし』

テレビなどほとんど見ないと思っていた茜が、バラエティ番組を見ていたことに驚いた。考えてみれば、実家には彼女の両親がいる。

彼らはテレビ好きで、居間には巨大な薄型テレビが置いてあったはずだ。

「でも、僕が学校を出た後で、動きがあったようなんだ。ついさっき、教頭から電話で指示されたから」

『それは、もしかしたら——』

茜が遠慮がちに言い淀んだ。

「何か知ってるのか？ 知ってるなら教えてくれ」

『夕方のテレビ番組に、なんとかという区議会議員が出て、鉄ちゃんのことを非難してた。ひよつとすると、それが関係してるのかなあ  
と  
思  
っ  
て』

「乗鞍議員かな？ 乗鞍陽子」

『うん、なんかそんな名前だった。真っ赤なスーツを着てる人』

「間違いない」

元高校教師の区議会議員だが、派手好きで、赤いスーツを好んで着ている。

——彼女か。

テレビで非難の声を上げただけではいだろう。乗鞍は、校長とも親しい。きつと、校長とひそかに会話して、私を出勤させないよ  
うに頼んだのだ。きつとそうだ。

『鉄ちゃん、早まったらだめだよ。とにかく今は、教頭先生が待機  
しろと言うのなら、黙って待機したほうがいいし。しばらくすれば、  
きつと落ち着くから』

「だといけれど……。結衣はどうしてる？」

『うん、まあまあ——』

「まあまあって、今日は登校したのか？」

『ううん。学校には行きたくないって。朝からずっと、部屋にこもってる。食事は差し入れたけど』

茜の実家は郊外にあつて部屋数が多いうえ、茜の両親は孫の結衣に甘い。余っている部屋を、結衣の個室としてぜひたくに使わせてくれているのだ。

「結衣に伝えてくれ。結衣が恥ずかしがるようなことは、何ひとつないんだ。週刊手帖の件も、テレビの件も、僕への嫌がらせだ。なんの根拠もないし、証拠もない。どうせすぐに、落ち着くから」

茜が一瞬、ためらった。

『——信じていいんだよね？』

私は虚を突かれた。

「——茜は僕を信じてないのか？」

『そうじゃないけど』

「だって、不安なんだろう？」

『鉄ちゃんが女生徒に手を出したりしないのは、よくわかってるよ。ものすごく教育熱心だし、生徒のことを真剣に考えて、正しい方向に育てようとしていることも。だけど——』



「だけど？」

不安になり、私は口ごもった。

『ネットの動画を見てしまったの。鉄ちゃんが子どもを吊り上げて揺さぶってるやつ』

「あんなのフェイクだよ。あんな生徒はうちにいないし、制服だつてよく見れば違う」

『そうだよね。あれはフェイクだと私も思う』

あれは、という言葉に悪い予感がする。

『だけど、生徒のことを大事に思って、真面目に守ろうとすればするほど、つい手が出る場面もあるんじゃないかと思うから、それが心配なの。——森田君の時みたいに』

「森田の時は、僕は被害者だ。刺されたんだから」

『そうじゃなくて——森田君に刺されかけた上級生がいたじゃない。鉄ちゃん、あの子が森田君を虐めていた時に、叱ったって言うってたでしょう。はずみで、ちよつと手が出てしまったって』

「——そんな、茜が心配するほど、殴ったりしたわけじゃないよ」

『そうなの？』

「そうだよ。森田を小突きまわしていたから、叱っただけだ」

『それなら、いいけど——。鉄ちゃんはいつも、私たちより生徒のほうを優先してきたんだから、その生徒たちから裏切られないでね』

茜は疲れたような声をしていた。通話が切れたが、最後はやっぱり捨て台詞ゼリふのようだったと思った。

——いつも、私たちより生徒のほうを優先してきた。

それは、実家に帰る前の日にも、茜が私に言い放ったのと同じ言葉だった。

あの日、茜の不満は、堤防が決壊したかのように爆発した。結衣がインフルエンザにかかった時、うつると困るからと、私がホテルから仕事に通ったことまで持ち出された。中学三年生を担当していて、ちようど受験の季節だったのだ。私がいもインフルエンザにかかり、それを生徒にうつしてもしたらと思うと、いくら娘が不憫ふびんでも、自宅にいることはできなかった。

結衣の入学式や卒業式を、茜にまかせつきりだったのもしかたがない。その日は私の学校でも同じように入学式や卒業式があったのだ。担任が欠席するわけにもいかない。こんなのは、すべての教師のジレンマだ。

四年前の結衣の誕生日には、私は警察署にいた。森田に刺されて、被害者なのに保護者の代わりに彼に付き添っていた。それ以外の誕生日にだって、ほとんどまともにお祝いなどできたためしはない。わかっている。

去年もその前の年も、結衣の誕生日はテレビ番組の収録で自宅に

戻ったのが遅かった。だが、それほど家族が不満を覚えていたのなら、その時にそう言ってほしかった。

爆発するほど不満をため込んでいたなんて、気づかなかつた。黙っていても悟れと言われても、私には無理だ。

——もう元には戻れないのかな。

茜の気持ち落ち着くのを待って、今度の土日にも実家に謝りに行く。

そのつもりだったが、この調子ではとてもそれどころではない。いま私が向こうの実家に行けば、騒ぎになるかもしれない。

このまま、別れることになるのだろうか。そうなれば、結衣は茜のほうに引き取られるのだろう、たぶん。私に落ち度があるとは思わないが、離婚の際には母親が子どもを引き取ることが多いと聞く。

私はビールの残りを、喉を鳴らしてほとんどひと息に飲み干した。あまり酒に強いほうではない。気分は、やけっぱちだ。

明日から学校にも行けない。中間試験の問題はどうするのだろうかなどと、考えてもしかたがない。今日はもう、風呂に入って、さっさと寝てしまったほうがいいかもしれない。

服を脱ごうとした時、またスマホに着信があった。名前を見て、私は躊躇ちゆうちゆうした。

以前は一日に何度もかかってきたこともあるが、ここしばらくは

話していなかった。昨年、高校を中退して、大工の見習いになったと言っていたはずだ。電話がないのは、仕事が順調で忙しいのだろうと思っていた。

電話をかけてきたのは、森田——私を刺した元生徒だった。

6

『なあ、先生。なにやってんだよ』

ためらいながら電話に出ると、森田がいきなりそう言った。

「なにとは？」

『ネットで、すごい先生のことデイスられてるんだ。生徒を殴ったり、耳つかんで引きずったりしたって？』

「そんなこと、するわけないじゃないか」

私はがつくりと肩を落とした。

「先生が、森田にそんなこと、したか？」

『ううん、してない。それじゃあれ、嘘なの？ 動画も全部？』

「嘘だ。フェイクニュースだ。でっちあげられたんだ」

『何それ、わけわからん』

わけがわからないのは、私も同様だ。

「仕事、うまくいってるか？」

『うーん。まあまあかなあ』

「人間関係は？ 森田はいい奴だけど、周囲に誤解されやすいからなあ」

『うちの社長がさ、いい人なんだ。だから、仕事は問題ないんだけど』

すつと声小さくなった語尾が気になる。

「——けど？」

森田は、私が焦<sup>じ</sup>れるくらい、長い間黙っていた。沈黙の長さが、事態の深刻さに比例しているような気がして、気が重くなった。

『——ううん。なんでもない』

「こら。なんでもないって感じじゃなかったぞ。森田は四年前もそうだったよな。そのくせ、突然キレて、遠藤にナイフ持って飛びかかったんだから」

『ああ、もう、それ勘弁してよ。先生が止めてくれなかったら、大変なことになってたの、俺にもよくわかってるよ』

情けない声を出したので、私はちよつと笑い声を上げた。

「わかってたら、よろしい。でもな、何か困ったことが起きてるのなら、先生でなくても、周りの人に相談するんだぞ。もう中学生じゃないんだから、ギリギリまで追い込まれて、思い詰めたりするんじゃないぞ」

『うん——』

存外、素直に森田が返事をする。

四年前、森田は一学年上の、遠藤という生徒に、目をつけられていた。

私が勤務する常在中学は、市内でも若干、貧困な家庭が多いエリアを校区内に抱えている。もちろん、貧しければ生活態度が悪くなるなんて、短絡しているわけではない。素直に育ったいい子たちのほうが多い。だが、両親、あるいは片親が、生きるために必死で働いているあいだ、子どもに目が届かないことがあるのだ。

同じ学校の中でも、子どもたちの間で格差がある。教科書代など必要なくとも、私服やランドセル、靴などでも差がつく。

子どもはそういう、ちょっとした違いにも敏感で、無駄な優越感を抱いたり、無用な劣等感に悩んだりもするものだ。

三年生の遠藤は、父親がアパレルメーカー勤務の会社員で、母親は近所の喫茶店でアルバイトという家庭で育った。かたや、森田はシングルマザーの家庭だった。森田の母親というのは固い性格で、近所の建築会社の経理をしていた。息子を真面目に育てていたが、パートの給料で親子の暮らしを立てるのは、苦労も多かったはずだ。

問題は、森田がサッカー部のエースだったということだ。常在中学のサッカー部は、県内の強豪として知られている。顧問は、体育

教師の辻山ともうひとりだ。交代で指導に当たっているらしい。

遠藤も一年生の時はサッカー部だったが、二年生に進級するとすぐ、退部した。膝が痛むと申告したが、技術的についていけなかったのが真相らしい。

一年生でサッカー部に入るとすぐ、めきめきと頭角を現した森田に、遠藤は嫉妬した。

自分よりずっとサッカーが上手な、ひとつ年下の森田は、踵かかとや爪つま先に穴が開くまで運動靴を履きつぶしたし、詰襟つめえりの制服は、知り合いにももらったお古だった。事件の後でわかったことだが、それを、遠藤はしつこくからかっていたのだ。

社交的で友達が多い遠藤には、サッカーは上手だがおとなしくて内向的な下級生を、言葉の槍で傷つけることくらい、朝飯前だったようだ。

言葉でいじめても森田が歯向かってこないと、だんだん遠藤は調子に乗った。よろけるふりをして突き飛ばしたり、軽く小突いたり、嫌がらせもエスカレートした。

私がよくやく気づいて遠藤を叱ったのも、その頃だ。

「でもな、先生はあの時、森田はすごいなと思ったんだ」

『すごい？ 何が？』

森田は恥ずかしそうに尋ねた。

そろそろ十九歳だろうが、まだまだ初心うぶなところがあって、建設現場のような男っぽい職場にいても、すれていない。

「遠藤が、森田の着ているものに、妙に絡んでいったらどう？ だけど、森田はずっとそれを無視してた。だから、大人っぽくて偉い奴だなと思ったんだ」

『俺んち、貧乏だからな。だけど、おかんが買ってくれたものだから、大事に着てたよ』

「うん。森田は立派だと思う。森田のお母さんは、鼻が高いな」

『——ん』

森田の声が、翳かげっている。何が彼の心に引っかかったのか、わからなかった。

「電話してきたのは、何か用があったんじゃないのか？」

『いや、テレビ見てびっくりして』

「心配かけたな。だけど、先生は何も悪いことをしているわけじゃないし、時間がたてば何とかなりそうだから」

明日から出勤できないことは、言わなかった。もう現役の生徒ではない森田に、よけいな心配をさせてもいけない。

『それじゃ、先生もあまり気を落とすなよ』

どっちが生徒かわからんなど苦笑しながら、通話を終えた。森田と話して、気分は少し良くなっていた。事件の時にはどうなること



かと思ったが、立派に立ち直って良かった。警察官も、事件に至る状況を総合的に聞いてくれて、形式的ではない対応をしてくれた。周囲のサポートが良かったのだろう。

シャワーをして、今夜はもう寝ることにした。明日から、どう時間を使えばいいのか、それが心配だった。

明け方、軽い揺れで目を覚ました。

地震だ。

軽いとは言っても、窓がガタガタと鳴り、ベッドが揺さぶられる感じがして、眠りから引き戻されるくらいの地震だった。

ビルの上層階は、揺れが増幅されるし、寝た体勢だと揺れを敏感に感じやすい。だから大きく感じたのだ、落ち着けと自分に言い聞かせたが、胸がどきどきしている。

スマホに緊急速報は入っていない。いろいろ検索してみると、千葉県沖が震源で、私のいる立川は震度2と出ていた。

なんだ、と安堵したものの、それからもう一度眠るのは難しかった。午前四時五十分。窓のカーテンを開けてみると、外は暗いのだが、空の一部がうっすら明るみ始めている。

自宅ならまだしも、こんな時にホテルで大地震に遭うなんて、ぜったいに御免被<sup>ごめんこうむ</sup>りたい。何の用意もしていないから、歩いてでも

自宅に戻らざるを得なくなるだろう。

——そうか。いま大地震なんか起きたら、私の事件どころじゃなくなるな。

一瞬、そんな馬鹿げたことが脳裏をよぎり、自分を叱りつけた。しかし、自分はいったいなぜ、こんな時にひとりでホテルの部屋にいたのだろうか。

誰かが私を陥れようとしているからだ。

朝まだき、揺れに驚いた私の鼓動は、まだふだんよりずっと速いが、頭はやけにすっきりとして冴えている。

週刊手帖の記事、そしてネットのフェイク動画やニュース。

ただのいたずらにしては、手が込んでいる。量も多いし、機動的ですらある。私を憎んでいる誰かが、事実を捻じ曲げてでも、私を今いる場所から引きずり下ろそうとしているのだ。だが、いったい誰だろう。

私を嫌っている、誰か。

私を憎んでいる、誰か。

憎まれて喜ぶ人間は、あまりいない。「憎まれてなんぼ」と虚勢を張る人間はいても、本心は違うのが普通だろう。

できれば愛されたい。できれば尊敬されたい。いい人だと思ってもらいたい。そういうものだ。

だからこそ、私を憎んだり嫌ったりしている人間がいれば、気づくに違いないと思っていた。だが、よく考えてみても、なかなかそれらしい相手はいない。

私に対してはつきりと反感を示す人間はいる。たとえば、学年主任の常見つねみがそうだ。四年前の事件までは、そんな態度ではなかった。事件の後、テレビに出るようになってから、嫉妬心を露あらわに出すようになった。

——嫉妬でここまでするだろうか。

だいたい、常見にできるとは思えない。彼はパソコンが苦手で、今でもガリ版刷りが懐かしいなどと言っているパソコン音痴だ。犯人は、写真や動画の加工もできる。ネットの扱いにも慣れているようだ。タイプとしては正反対だ。

——では、誰が。

憎しみを抱きやすいのは、その相手と近しい関係にある人間だとも言われる。まったく無関係な相手には、人間は嫉妬も抱きにくい。

仕事関係なら、常在中学の教職員。それに、生徒とその保護者。

モンスター・ヘアレンツの水森夫妻の顔が浮かんだ。夫のほうがいいが、嫉妬しているのは間違いない。彼らのパソコンスキルは知らないが、動機は充分ある。なにより、学校にクレームばかりつけてくる、あの態度だ。

それから、東都テレビの羽田はたプロデューサーと、彼の教育関連バラエティ番組『ソフィアの地平』を思い出した。出演者は、塾講師のロックこと鹿谷直哉と、教育評論家の遠田道子とおだみちこ、それに大おお学教授の大おお菅健人すがけんと私の四人だが、私の後釜あとがまに座りたい人間だっているかもしれない。

他の出演者たちはどうだろう？ 遠田はマイペースだが、羽田の子分のようなロックには、私を陥れるメリットがあるだろうか？

それから、区議会議員の乗鞍陽子も怪しい。彼女はなぜ、週刊手帖の記事が出た翌日、校長を呼びつけて密談したのか。テレビに出てまで私を非難したそうだが、何か私に恨みでもあるのだろうか。

いろいろ考えても、正直、こいつが特に怪しいという人物を特定するには至らなかった。というか、疑えばいくらでも疑える。疑心暗鬼というやつだ。

横河弁護士が言ったように、フェイクニュースを投稿した人物の正体を突き止めれば、すべてはつきりするはずだった。

もう眠れそうになかったので、私は身支度を整えにかかった。出勤しないにしても、きちんとした服装をしておきたい。自宅できつろぐ休日ではないのだ。

朝食を買いにコンビニに出かけることも考えたが、まだ早いので、ホテルに備え付けの電気ポットで湯を沸かし、インスタントコーヒ

ーを入れた。

あまり見たくはなかったが、しかたがない。パソコンを開いて、横河弁護士に教えられた通り、私に関するフェイクニュースを検索し、ひとつひとつ情報を保存していく。

どれもこれもひどい内容で、読むだけで頭に血が上った。とにかく我慢だ。あまり内容には踏み込まず、URLや画面のハードコピーなどを残す。このデータが、いずれ犯人を捕まえる手掛かりになると思えば、苦行を耐える原動力になった。

ざっと検索しただけで、動画が五件、写真などの記事が二十件は見つかった。よくこれだけ、もっともらしい嘘を捏造ねつぞうできるものだ。

怒りがこみ上げる。

気がつく和二時間ばかり経っていた。窓の外は、すっかり明るくなっている。

夢中で検索している間は忘れていたが、急に腹の虫が鳴りだした。コンビニでパンでも買うか、近くのコーヒESHOPで朝食をとるかしよう。

財布とスマホだけ背広のポケットに入れ、ホテルの部屋をぶらっと出た。エレベーターホールでは、スーツケースを引いた背広姿のビジネスマンがひとり、先に待っていた。私とちよつと似た雰囲気

の髪型だった。

彼と一緒に下りのエレベーターに乗り込み、一階に下りる。ビジネスマンはさっさとフロントに向かったが、私はホールの隅に新聞が積んであるのを見て、そちらに向かった。

妙に、ホテルの一階がざわついていた。

「えっ、何ですか、あなたは！」

先にフロントに向かおうとしていたビジネスマンが、声を上げている。そちらを振り向きかけた私は驚いて、急いで新聞で自分の顔を隠した。

——テレビのレポーターだ。

「あっ、失礼しました。人違いです。カメラさん、すいません。違いました。鉄腕先生じゃないです！」

女性のレポーターが、大きな声で叫ぶ。

私は彼らに見つからないよう、慌ててエレベーターホールに戻った。上りのボタンを連打する。エレベーターは一基しかなく、下りてくるまでもどかしかった。

——どうして、居場所がバレたんだ。

このホテルに泊まっていることを知っているのは、学校では教頭と、車で送り迎えをしてくれた体育教師の辻山だけのはずだ。あとは勇山記者と、横河弁護士のみだ。

そう言えば、フロントの女性スタッフが、昨夜もちらちらと私の顔を見ていたが、気づいた誰かがマスコミに教えたのだろうか。

ようやく下りてきたエレベーターに乗り、さっさと扉を閉めた。どうしたものだろう。今このホテルから出ると、待ち構えているレポーターの元に飛び込むことになる。ずっと部屋に閉じこもっているわけにもいかない。ルームサービスのないビジネスホテルなので、奇数階に飲み物の自動販売機くらいはあるが、食事がとれない。

——ホテルを移るべきだろうか。

だが、ここから出るにはフロントを通らねばならない。レポーターを振り切ったとしても、移動は電車またはタクシーだ。どうせまた、ついてくるのではないか。

それなら、彼らが諦めるまで、部屋にこもっているほうが無難だろうか。

だいたい、ちゃんと記者会見もしたのに、なぜ彼らはこんなところまで来るのだろうか。

いったん、元いた部屋に戻ってきた。表の様子を覗きたかったが、私の部屋の窓は隣のビルに面していて、何も見えない。

部屋の内線電話の受話器を上げた。

『フロントでございます』

「すみません、七階の湯川です」

相手の女性が、「あ」と口ごもった。うつかりこちらの名前を復唱しかけて、やめたのかもしれない。

「ロビーにテレビ局の人が来ているようですね。お騒がせして申し訳ないです」

『いえ……。とんでもございません』

「ちよつとお願いがあつて電話しました」

『はい、どのようなご用件でしょう』

声がかくぐもった。レポーターたちに聞こえないように、声を低めたのかもしれない。

「食事に出ようとしたんですが、一階の様子を見て引き返してきました。あの人たちは、諦めて立ち去りそうですか」

『いえ——もう一時間ほど、ああしておられますから』

諦めないのか。私はため息をついた。

「このホテルには、こつそり出られる裏口のようなものはありますか」

『ビルの裏手に、従業員用の出入り口はありますが』

「そこから私も出られないでしょうか。あの人たちに見られず外に出たいんです」

『チェックアウトなさいますか？』

迷った。予定では、しばらく連泊するつもりだった。



「まだチェックアウトはしません。いったん、外に出るだけです」  
『わかりました。それでは、エレベーターで二階に下りていただけ  
ますか？ 私も二階に行きますので』

わざわざ来てくれることに礼を言い、私は手早く身の回りの品を  
まとめた。大事なパソコンを鞆に入れる。下着など、すぐ手に入る  
ものは、ビニール袋にまとめて置いておくことにした。チェックア  
ウトしないと言ったものの、まだはつきり決めたわけではない。  
万が一、戻ってこられなくなった時のために、ホテルのレターセッ  
トの封筒に宿泊代金の残りを現金で入れ、引き出しにしまっておい  
た。

それから、急いで二階に行った。

「お待たせしました」

「こちらへどうぞ」

待っていたのは、昨日のフロントスタッフではなかった。彼女は  
エレベーターとは通路を挟んで逆側にある、階段に案内してくれた。

「この階段を下りると、従業員用の出入り口にすぐ行けるんです」

「助かります」

「いいえ。なんだか大変そうですね。何かあったんでしょうか？」

彼女は、階段を下りながら、世間話のつもりなのか、好奇心を覗  
かせて尋ねた。ひよっとすると、あまりテレビを見たり、週刊誌を

読んだりしないタイプなのかもしれない。私のことは知っていても、騒ぎのことは知らないのだろうか。

「テレビ局の人は、何か言っていましたか？」

「いいえ。でも、鉄腕——いえ、湯川様を捜してらっしゃるようでした」

やはり妙だ。昨日の記者会見は、こちらに好意的な雰囲気で終了した。私の言葉に嘘はないし、記者たちもほとんどが信用したようだった。それが、なぜまた蒸し返すように、ホテルにまでマスコミが押しかけたりしているのだろう。

「こちらから出てください」

彼女は、従業員用の出入り口を開け、私に通れと言った。

「ありがとうございます。助かりました」

「カードキーはお持ちですか」

「ええ。持っています」

「お戻りの際は、フロントにお越しになれるといいですね」

「本当に」

外に出て、タクシーを拾った。レポーターたちは、裏の出入り口まではチェックしていなかった。

「日比谷にやってください」

横河弁護士が、東京地方裁判所に近い、日比谷に事務所を構えて

いる。まずはそちらに、今日の調査結果を届けるつもりだ。マスクミがホテルに押しかけていることも話し、この後の対応について相談してみてもいい。

「お客さん、どこかで見たことあるなあ。ひよつとして、テレビに出ています？」

タクシーの運転手が笑顔で尋ねた。私の危機感が増した。自分で考えている以上に、一般の人にも広く顔を覚えられているらしい。

日比谷に着いたら、まずはコンビニに行き、朝食と花粉症用の大きなマスクを買おう。顔を隠すのだ。

日比谷に向かいながら横河弁護士の事務所に電話をかけると、横河は別件で裁判所に行っているそうだが、一時間もすれば戻ると事務の女性が請け合った。

「では、一時間くらい後に伺います。湯川と申します」

タクシーの運転手が、バックミラー越しに「そうか、鉄腕先生か」という表情をこちらに向けてきた。これで、また私の居場所が広まるのだろうか。

日比谷公園のそばで降りしてもらった。コンビニを探し、欲しかったマスクを見つけてホッとする。サンドイッチとコーヒーを買い、日比谷公園のベンチで食べた。

食べながら、スマホでニュースを読み、ツイッターでエゴサーチ

をしてみた。嫌な予感がしたのだ。

——これか。

ひどく拡散している眩くらきがある。

『鉄腕先生こと、湯川鉄夫の指導を受けた生徒の親です。彼は教育者の鑑かがみのようにもてはやされていますが、その実、女生徒に対するセクハラがひどく、注意した生徒を怒鳴りつける、暴力をふるうといった問題教師です。騙だまされている人が多すぎるので、あえて書きます。偽善者に騙されるな！』

思わず眉根が寄った。

これはいったい、何者だろう。このツイートをしたのは、「子どもを守る親の会」というアカウントだった。眩くらきは私と常在中学に関することばかりで、アカウント自体、昨日の夜にできたばかりだ。

万単位でリツイートされているが、さすがに身元を怪しまれてもいる。

書くだけなら、いくらでも常在中学の保護者になりすますことくらいできるだろう。

『本当に保護者なんですか？』

『現役生徒ですか？ 卒業生ですか？』

などというプライに交じり、テレビや雑誌からの問い合わせが入っている。

『詳しいお話を伺いたいので、お手数ですが相互フォローをお願いできないでしょうか。DMを送ります』

ということは、マスコミはこのツイートに、何らかの信憑性しんぴようせいを感じる理由があるのだ。「子どもを守る親の会」の呟きは、まだ百回にも満たない。最初から、ひとつずつ確認していくことにした。かなりの苦行だった。このアカウントは、とにかく私を攻撃するためだけに作られたようだ。

——何者だろう。

半分ほど読んだあたりで、着信があった。

「——横河先生？」

『湯川さん、今どちらにいらっしゃいますか』

「日比谷公園ですが。これからすぐ事務所に向かおうと思ひまして」

『あ、いや、少しお待ちください』

横河は妙に性急な雰囲気で、事務員と話をしているらしい。

『お待たせしました。私が車で迎えに行きます。マスコミに見つかると面倒ですから』

「何かあったんですか」

『ご存じないのですか』

横河が驚いたように言った。

『昨夜遅く、常在中学の生徒の保護者がテレビ局の取材に応じて、

先生を非難したんです。それで、また火がついたようになっています』

「非難って——」

寝耳に水とはこのことだ。

『ともかく、迎えに行きますよ。先生と会っていることがバレて、私が動きにくくなると、今後の調査に差しつかえますからね。本意ではありませんが、こっそり動きましょう』

横河と落ち合う場所を決め、電話を切った。急に人の目が気になって、マスクをかけた。落ち着かない。

生徒の保護者がテレビに出て、私を非難したというのが信じられなかった。スマホで検索すると、ニュースの動画が引っかけた。

中年の男性が出ている。顔をぼかし、声は変えてあるが、水森だと私は思った。態度の横柄おうへいさが、あの男らしい。

『湯川先生は、うちの子の頭を壁に押しつけて、怒鳴ったんですよ。うちの子は、それですっかり学校恐怖症になってしまってます』

——なんだと。

私は啞然あぜんとした。水森の息子を怒鳴ったことなどないし、暴力をふるったこともない。だいいち、あの子が学校恐怖症だなんて、聞いたこともない。

「どうしてそんな嘘を」

ハツとする。やはり、あのフェイクニュースは、水森の仕業ではないのか。こんな嘘を平然とテレビカメラの前で喋る男だ。嘘はお得意なのだ。

横河の車を待つ間に、私は水森に対する怒りを募らせていた。

(つづく)